

小さな考慮は規模において問題にならない。ロシアは国内と外国において巨歩を印している。世界革命の引金なのだ。だからわたしはそれを克服すべきだ。「何かやり給え。それがあなたの革命的均衡を保つ最善の方法です。」と彼は助言して呉れた。

わたしはレーニンが正しいかも知れないと考えました。彼の助言を受け入れよう。そして直ちにとりかかりましようと思えた。だがロシアにおいて仕事はしない、米国向けに価値のある宣伝をするのです。わたしは「アメリカの自由に対するロシア友の会」を組織したい。それは自由を求めるアメリカの闘争を支援する活動母体で、以前ロシアが皇帝制に反対した際、ロシアの自由に対するアメリカ友の会」のやったと同じことをするのです。

レーニンはそれまでずっと席を動かなかったのですが、この話で椅子から飛び上りました。彼は席を廻わり、わたし達とむきあつて、

「それは素晴らしい考えだ。」彼は叫び、くつくつと笑つて手をもみました。

「立派な実際の提案です。直ちにとりかかるべきだ。同志ベルクマン、貴君も参加するでしょうね？」
 サーシヤはその問題で討議を重ね、計画の細部をすでに考えていると答えました。わたし達は必要な準備を整えはすぐ実行できる。

レーニンはその心配はいらない。すべてを供給しよう——例えば事務所、印刷設備、下働きの人員、それから必要なだけの資金でも——と保証しました。わたし達は仕事の見込みとそのプロジェクトに要する費用の諸項目を彼に提出しなければならぬ。第三回インターナショナルでその問題を討議しよう。それがわたし達の試行の適切なルートであり、支援の手が差のべられるだろうと彼は言います。わたし達はあつけにとられお互いに顔を見合わせ、レーニンを眺めました。それと同時に、わたし

達の尽力は、いわゆるボオルシェヴィキの組織と提携しない自由があつて、効果を現わすのだと説明しました。わたし達のやり方でしなければならぬのです。わたし達はアメリカ人の心理をよく知つて居、仕事をどうすすめるのが最善かも知っています。けれどそれ以上説明する時間もなく、わたし達の案内人が立去つた時と同じように邪魔にならないよう突然現われ、レーニンは別れの手を差し出しました。

「私に見込みを知らせて下さい。」

わたし達の背後から彼は呼びかけました。

*この会見は一九二〇年の暮に近く行なわれたものと推定される。

P^{*1}・クロポトキンを訪問

列車は水タンクの各設置所で止まりながら蛇行のように進んだ。わたし達が彼の家に着いたのは夜も更けていました。ピーターは病気でやつれていました。一九〇七年パリとロンドンでわたしが見かけた頑健な頃の人影をみるようでした。わたしはロシアに来てから、著名な共産主義者達は、クロポトキンが快適な生活を送り、食物や燃料に不足していないと繰返し保障しました。だけどここではピーター

ーと妻のソフィそれに娘のアレキサンドラが十分な暖房のない一部屋で生活しているのです。他の部屋は零下〇度以下で住めない。生きるのに必要な配給食料は、極く最近、ドミトロフの協同組合から支給されていきました。その組織もその他多くの同じような制度と共に解体され、組合員はほとんど逮捕され、モスクワに居るバッテリーの刑務所に入れられていました。どうやって生活しているのか、わたし達は訊ねました。ソフィは一匹の乳牛を飼い、冬中は自家園の作物で凌げると説明しました。ウクライナの同志達、特にマフノは特別の食料を送って呉れる。ピーターが最近のように病気でなければ、それに栄養食の必要がなければやっていけるとのことでした。

ロシア最高の人のひとりが飢え死にする事実に対し、責任ある共產主義者を立ちあがらせ得ないのだろうか？ 彼等は彼がアナキストである故に興味をもたないにしても、科学と文筆の人であるのは知っている筈です。高職にあるレーニン、ルナチアルスキーその他は、多分、ピーターの近況を知らされていないのだろうか。わたしが彼の状態について注目させることができるだろうか。ランスバリーはこの点わたしに同意した。ヘビーター・クロボトキン程の偉大な人を生活苦に放置するなんて、ソヴェト政府の高官にはできないことだ。英国だったらわれわれはそんな常識に耐えられない。彼はすぐソヴェトの同志達に計ると言った。ソフィは何度も彼の袖を引っぱり発言をとどめるのでした。彼女はピーターに聞かれまいとするのでした。けれどわたし達の愛する魂（ピーターの事―訳註）は二人のアレキサンダー達（A・ベルクマンとアレキサンドラのイニシャルを言う―訳註）の会話に魅せられ、わたし達が彼の身 pensando 議論しているのは気づかなかった。

ピーターはボルシェヴィキからは何も受け取らないとソフィが語った。暫く前までルーブルはまだ価値があった。けれど彼は自分の著作の発行権について、政府出版局からの廿五万ルーブルの提供申

込みを拒絶したのである。ボルシェヴィキは他人を搾取するぐらいだから、彼の著作も利用するのだろうかと彼は言うのです。しかし刊行は彼の同意を得ないで行われました。彼はどんな政府ともかわりは持たない。また社会主義の名において、すべての革命的倫理的価値を無効にしているものと何かをする意図はなかったのです。ソフィは、ルナチアルスキーがピーターの為に計った学者向けの配給を受け取らせようとしても駄目でした。だから彼の弱って行くのを見て、ソフィは彼に知らさずそれを受け取らざるを得なかったのです。彼の健康の方が彼の遠慮より自分にとって大事だと彼女は弁明した。その上、彼女は植物学者として、自分も学者向けの配給を受けていました。

サーシャはロシアで見た革命の矛盾の複雑さとして、自分も学者向けの配給を受けていた。いろいろな解釈、そしてレーニンとの会話をピーターに話しました。わたし達はピーターの視点と状況に対する彼の反応が知りたかったのです。彼はマルクシズムとその理論にはいつでもそれがあつたと答えた。その危険を予見して、いつも警告してきたのだ。アナキストはそうしてきたのだし彼自身はその著作のほとんどすべてでそうした事柄を取扱ってきた。わたし達のうち誰もマルクシアンの脅威がどの程度に成長するか十分知っていた者はいなかった。その教義のジエスイット精神はマルクシズムでも同じである。ボルシェヴィキはそれに毒され、彼等の独裁は大審問官の専制政治を凌がしている。彼等の力はヨーロッパの狂った政治家達によって強化されたのだ。封鎖、連合国の反革命分子援助、介入、その他革命を粉碎しようとするすべての試みが、ロシア国内においてボルシェヴィキの横暴に対するあらゆる抗議を沈黙させる結果になっている。

「それに抗議の声をあげる人はいないのですか？ その声に重みのある人、例えばあなたのような方ですよ、同志」わたしは訊ねた。

ピーターは悲しそうに微笑した。彼はわたしがつとこの国に滞在したら、よく判るだろうと答えました。言論の抑圧が世界でもつと完全なのです。むろん彼は抗議しました。他の人達もそうしたのだし、その中には尊敬すべきヴェラ・フィンガー、マキシム・ゴーリキだつてはしばしばやりました。けれど効果はなく、チエーカがいつも戸口にいたのではどんな書きものも可能ではありません。人は自分の家で、犯罪的な事柄はできないし、まして他人をそれが発覚したため、罪を負わせる危険にはさらされないのです。それは恐怖ではない。チエーカの国内刑務所から外の世界へ届けることの無益さと不可能なのを自覚するものです。しかし障害は、敵がロシアを取巻いていることでした。ボルシェヴィキに反対して言う事、書くものは外の世界へ、革命への攻撃であり反革命勢力に同調するものだと解釈される次第でした。特にアナキストは二つの火の中間にいました。彼等はクレムリンの恐るべき勢力と和解できず、ましてロシアの敵と手は組めない。現状での唯一の代替えは、大衆に直接の利益をもたらす何らかの仕事を見つけることだとピーターはみていました。彼はわたしの決定を喜んだ。

「レーニンの奇妙なところは、あなた方を党のエプロンの紐にくくりつけようと望んだ点だ。それは智慧とは別なずるさを示すものです。レーニンのずるさは誰も否定できない。農民に対する彼の態度、内外の墮落のひろがりに対する彼の評価には本当の判断や賢明さがみられない」彼はそう言いました。

夜も遅くなって、ソフィがピーターに引きこもるよう説きました。けれど彼はいやがった。長い間同志から切り離され、事実何らかの知的接触から離されているのだと彼は言いました。わたし達の訪問は最初、彼を緊張させたかに見えた。けれどやがて疲れの徴候を示したので引きさがるとき機だと思

ったのです。わたし達のピーターは疲れていても優しく毅然としていました。彼はわたし達の立去るのをみて更たためわたし達を自分の心に抱きしめる他はなかったのです。

*1 訪問は先のレーニンとの会見のあとドミトロフ(モスクワから六〇露里の地点にある村)に隠棲中のクロボトキンを訪ねた際の印象記。

*2 ソフィ・クロボトキン(Sophie Kropotkin)一八五六年キエフにユダヤ系として生まれる。五才で金鉱を経営していた父に連れられシベリアのトムスクに移る。裕福な家庭の子女である。彼女の言葉では、一七才で鉱夫達の苦しい生活に同情し、その労働で得た金銭で生活するのを拒否して、家を出て自活した。彼女は「民衆のひとり」であり、賢い女になった。だが数年の労働と困難のため健康を損い、友達によってスイスへ送りこまれました。ソフィは間接話法で人に語っている。

クロボトキンとは一八七八年十月八日スイスで結婚。当時ピーターはジュネーブに在つて「前衛」誌次いで「反逆」誌を発刊していたが、ソフィはベルヌ(スイスの首府)で植物学を専攻していた。クロボトキンは彼女との出逢いを次ぎのように記している。
 「私はジュネーブで、ひとりのもの静かで親切な、厳しい青春期を通して、すばらしい気質にまで成長した極くおとなしいロシア娘に逢った」
 ソフィに就いては彼女が夫クロボトキンの身分を誇るスノビズムをもっていたと言われているが、生涯に亘る献身は認められている。

(一)S項 The Anarchist prince by G. Woodcock &
 Ivan Ava Kumovic, Schocken Books 1971 に拠る。

P・クロポトキンの死

わたし達がベトログラード行き切符を買った時、わが同志ピーター・クロポトキンが肺炎に患ったとの知らせをドミトロフから受けとった。七月に彼を訪ねた際は健康で陽気なのを見ていたから、このショックは大きかった。その時は先年の三月にみた折より若やいで状態もよかったと思う。彼の眼の輝きと生気からよい状態だとの印象を受けていたのです。クロポトキンの住居は夏の陽の中に花をつけ、ソフイの自家園も青々として美しかった。ピーターは誇らかに連れあいを讃め、彼女の庭師としての技倆を語りました。サーシャとわたしの手をとって、彼はソフイが特種なレタスを植えた一画へ、興奮した少年のようなはしやぎ方で案内して呉れました。彼女は株がキャベツ程の大ききで、葉が巻いたおいしそうなレタスを作るのに成功したのです。土は自分も耕したけど、ソフイこそ本当の専門家だと彼は何度もくり返し言いました。先年のじゃがいもの収穫は大きく、乳牛の飼料と交換しても十分残って居、野菜の少なかつたドミトロフ村の近隣の人に分けたぐらいだとのことでした。わが愛するピーターの自家園ではしやぎ振りには、そうした事柄が世界的な大事件でもあるかのようには語るのでした。わが同志の若やいだ精神に感染してわたし達は新鮮さと魅力にとりつかれました。午後、彼の書齋に集まると、彼は再び科学者と思想家になり、人物と事情について厳しい評価をするのでした。わたし達は、独裁、必然的に革命に加えられる強制手段、党の性質に固有なもの：等を

討議した。わたしはピーターに、革命と大衆にかけたわたしの信仰を破産させる恐れのある現状をよりよく理解させて貰いたかった。病気の子供に傾ける忍耐と優しきで彼はわたしを慰さめるのでした。絶望する理由はないと彼は言う。彼はわたしの内面の闘いを理解し、時がたてばわたしが革命と体制を区別することを学ぶに違いないと確信していました。この二つは異なる世界であって、時の経過に従ってその間の深淵は広がるのでした。ロシア革命はフランス革命よりはるかに偉大で、世界的意味を力強くもっている。各地の大衆の生活の根深い所を撃ち、人類が刈る豊かな収穫は予見できない。共産主義者は、中央集権国家の理念に決定的に執着し、革命のコースを誤って導くよう運命づけられている。彼等の目的は政治的主権の奪取であり、目的を達成するにはすべての手段を正当化する、社会主義のジェスイット派になるに違いない。だが彼等の方法こそ、大衆のエネルギーを麻痺させ、民衆をテロにかけるのだ。民衆がなくては、国の再建において耕す人びとの直接参加がなければ、創造的で重要な事柄は何一つ達成できはしない。

わが同志達も…とクロポトキンは続けた。過去において、社会革命の基本的要素を十分考察しない誤りを犯した。そうした動乱での基本的要因は、国の経済生活を組織することだ。ロシア革命は、わたし達がそれに宛て準備しなければならぬのを証明している。彼はサンジカリズムが、ロシアで最も欠けているものを、提供するように思うとの結論に達したのです。即ちサンジカリズムの通路によって、国の産業と経済再建が可能だ。彼はアナルコ・サンジカリズムに触れ、さような方式は、協働の助けをかりて、現にロシアが経ている決定的誤りと恐るべき苦しみから未来の革命を救うものだと指摘しました。

クロポトキンが倒れたという悲しい報らせに接して、わたしの心にはそのすべてが生きたいと去来

しました。ピーターに逢はずにペトログラードへ行くなどとは考えてもみなかった。ロシアでは腕のいい看護婦が少ない。だからわたしはわたしの師であり、友である人にできるだけのことをするのだ。わたしはピーターの娘、アレキサンドラがモスクワにいて、ドミトロフへ行くとおどろかされた。彼女は英国で訓練を受けたロシア婦人の優れた看護婦が、彼の看護にあたると報らせて呉れました。小さな家は既に客が一杯で、今のところピーターをかき乱すのは、勧められない。自分がドミトロフへ立ち、父の状態といつ逢ったがいかに電話で知らせると言いました。

ペトログラードの博物館はイスパルトでの会議の結果につき、サーシャの報告を待っていた。それで彼は北へ向け発たねばならず、わたしはモスクワに留つて、ドミトロフからの電話をあてにしています。数日たつてもアレキサンドラから連絡がなく、わたしはピーターがもちなおしたのだと結論して、わたしの用はないのだろうと考えた。それでペトログラードへむけ出発しました。

わたしがペトログラードへ着いて一時間もすると、ラヴィツチ夫人が電話を入れ、ドミトロフから緊急に来るようにとのことでした。モスクワからも長距離電話で、すぐ来るようにと伝言を受けた。ピーターの状態が悪化して、家族から直ちに來て欲しいとの依頼です。

わたしの列車は吹雪の中を走り、時刻表より一〇時間遅れ、モスクワへ到着した。ドミトロフ行きは翌日の夕方までないので、道路は自動車では越えられない雪の吹き溜りで塞がれています。電話は途絶し、ドミトロフへ届く方法がなかった。

その夕方の列車は腹だたしいほどのろく、燃料をつぎたすので幾度も停車した。わたし達が到着したのは翌朝の四時でした。クロポトキンの親友、アレキサンダー・シャピロ、パン職組合の同志パブロフ、それにわたしの三名は、急拠クロポトキンの家へいそいだ。でも遅かった！ ピーターは一時

間前に息を引取ったのです。一九二一年二月八日、午前四時、彼は死にました。

取乱した未亡人はピーターが何度も、わたしは既に出発したのか、何時着くのか訊ねたと語りました。ソフイはほとんど倒れんばかりでしたので、彼女の面倒をみることで、わたしの生涯と仕事に、強力な激励と示唆を与えて呉れたピーターの、最後のお役に立てなかった残酷なめぐり合わせを忘れました。

ソフイから教えられたのによれば、レーニンが病氣だと知ると、食料や珍味と共に、モスクワの最良の医師をドミトロフへ派遣しました。またピーターの容態書を新聞に発表すると同時に自分の手許へ送るよう命じたのです。チェーカによって二度捜査され、その為望まない隠退を強いられた人の死の床に、これほどの配慮が払われたのは悲しい記録にとどまるでしょう。ピーター・クロポトキンは、ロシア革命の基盤を作る手助けをした、だがその命と発展に参加することは拒絶されたのです。彼の叫びは帝制の迫害にかかわらず、ロシアに滲透した。しかし共産主義者の独裁によってくびり殺されたのです。

ピーターはどの政府の庇護も受けず、虚栄とみせかけは許さなかった。だからわたし達は国家が彼の葬儀にでしゃばるとか、官職者の列席で俗化させないことを決定した。地上でのピーターの最後の日々は、同志達だけの手で休ませてあげるべきです。

シャピロとパブロフはサーシャと他の同志を呼ぶため、モスクワへ出発した。モスクワグループと一緒に彼等は葬儀の責任を取るようになった。わたしはドミトロフに滞在し、ソフイを助けて、遺体を埋葬するため首都へ移送する準備をしました。

わが同志の沈黙した面前で、彼が全くエゴチズムを欠いていたにもかかわらず、みることできな

かった貴重な品々に接しました。わたしはピーターを知って廿五年になり、彼の生活、仕事、光彩ある個性には習熟していた。けれど彼の死によって初めて、彼が稀れにみる芸術家の資質をもった人であることを、その秘められたものが明らかにしたのです。箱の中に秘匿されていた多くの絵はピーターが極く僅かな暇をみて描いたのです。その特異な線描、形は彼が十分に時間をかけていたら彼の文章で達成した程のものが絵筆でもできたのを証明していた。ピーターは音楽に秀でていました。ピアノを愛好し、表現をみつけ、巨匠の作品を立派に解釈できたのです。単調なドミトロフでの生存で彼の唯一の歓びは、家族の中の二人の若い女友達とピアノを弾き歌うことでした。彼女達と共に毎週の夕べ、音楽の饗宴をやっていたのでしよう。

豊かな創造の才能に恵まれたピーターは高貴な社会的理想と彼の人間性においてそれ以上に豊かなウジョンで人類を抱擁しました。何を措いてもそのために、彼の八〇年に亘る意識的部分で働いたのです。事実、彼は床に就いた最後の日まで苦しい状態の下で、「倫理学」の一卷に精力を注ぎました。最後の時の深い悔いは、数年前に始めたその仕事を完成するのに時間が足りないことだったのです。

ピーターは過去三年間、大衆との緊密な接触から切離されていた。その死にあたって、人びとと完全な接触を取戻したのです。農民、労働者、兵士、知識人、遠方から来た男・女、それにドミトロフの全村から、彼等の中に住み、彼等の闘争、苦しみを分けあつてきた彼の許へ、最後の別れを告げに人びとが流れのように集まってきました。

サーシヤは、モスクワの同志達とピーターの遺体を、モスクワへ移すためドミトロフへ来ました。その小さな町はピーター・クロポトキンに対して呈した讃辞ほど、立派にやったのは他になかったのです。子供達は彼を知って居り愛していました。ピーターが一緒になつて子供らと遊んでやったから

です。学校は当日、彼の喪に服して休校になった。多数の人びとが駅に集まり、ゆつくり離れる列車につれ、ピーターに別れの手を振りました。

モスクワへの途次、わたしはサーシヤから、彼が組織を支援し、委員長になつたピーター・クロポトキン葬儀委員会が、既にソヴェト当局のずるい言い抜けに付されたのを知らされた。委員会はピーターのパンフレット二点とヘビーター・クロポトキン記念特集の発刊が許されていた。ところが後になつて、カメネフが議長であるモスクワソヴェトは、その「特集号」の原稿を検閲のため要求したのです。サーシヤ、シヤピロ、それに他の同志達は、さような手続きは発行を遅らせると抗議した。時間を稼ぐためソヴェトの人びとはクロポトキンの生涯と思想が記念号に現われているかどうか見たいからに他ならないと言訳するのです。それから検閲官は突然手許の仕事が一杯なのを思いだし、この問題は正當な順番が廻ってくるまで待つべきだとしました。その意味は記念号が葬儀の日に発行できないことで、事柄が効果を發揮するには遅すぎる時期まで引き伸ばす、いつものボルシェヴィキの戦術でした。わが同志達は直接行動に訴えました。レーニンも繰返し、アナキストの理念を評価している。だつたらどうしてアナキストがそれを彼から取返してはいけないのでしょうか？ 時間は差し迫つて居、目標は逮捕の危険を冒しても重要です。同志達はわが古い同志アタベキアンの印刷設備に施したチエーカの封印を破り、葬儀の日に間に合わすため、記念号の印刷でビーバーのように働きました。

モスクワではクロポトキンに対する評価と愛情の表現が巨大な示威行進になつた。遺体は首都に到着して、労働組合会館に安置されたのですが、二日間大理石の間に盛装して置かれ、「十月革命」以来絶えてなかった程の人出になつた。

葬儀委員会は、レーニンに要望書を送り、モスクワで刑務所に入れられているアナキスト達が、その師であり友であつた死者に最後の別れが告げられるよう、一時的釈放を求めた。レーニンは約束し、共産党実行委員会は *Vchdelka* (全露非常委員会) に「その判断に従つて」拘禁中のアナキストが葬儀に参加できるよう釈放を指示した。しかし全露非常委員会は、例へばレーニンであろうと、また自党の最高当局にさえ従うようにはできていなかった。受刑者が刑務所に帰ることの保障を葬儀委員会に要求してきたのです。委員会は全員で保証しました。それから全露非常委員会は、モスクワの刑務所にアナキストはいない」と宣言した。けれど本当はバタキーとチエーカの刑務所にはカルコフ会議の際襲われたわが同志達で一杯でした。この会議はソヴェトとネストル・マフノとの合意によつて公的に開かれたものでした。その上、サーシヤはバタキーの刑務所へ行く許可を得た時、そこで十二人程の拘禁中の同志達と話したことがあります。またロシア・アナキスト、ヤルチオクに伴なわれモスクワチエーカの内部刑務所を訪ねた時は、拘禁中の数多くの同志達を代表したアロン・パロシと話しあつている。それなのにチエーカは、モスクワの刑務所にアナキストはいない」と強調するのです。

葬儀委員会は再び直接行動に訴えた。葬儀の当日、委員会はアレキサンドラ・クロボトキン(クロボトキンの娘―訳註)に教えてモスクワソヴェトに電話しました。ソヴェトが信頼を破つたことを公表し、ソヴェトと共産党の諸組織がクロボトキンの棺台に捧げた花環は、レーニンの与えた約束が守られない限り撤去すると申し出たのです。

ホールはどのドアに至るまでも人でぎっしりでした。その中には欧州やアメリカの新聞記者がいます。わたし達の古い友人ヘンリー・アルスベルグは最近ロシアへ戻ってきたばかりですが出席してい

た。アーサー・ランソムはマンチェスター・ガーディアン紙の通信員です。これらの人はソヴェトの背信を広く知らせて呉れるでしょう。世界は、ソヴェト政府がクロボトキンの最後の病氣にあたつて施した配慮と注目を何週にも亘つて知らされています。もしきようなスキヤンダルが公表されるのなら、何を代償にしても防ぐべきです。カメネフ(ソヴェトチエーカの長―訳註)は再度歎願を寄せ、廿分以内に拘禁中のアナキストを釈放すると厳肅に約束しました。

葬儀は一時間延長された。師を喪つた大衆は戸外で、モスクワの厳しい霜の中に立ちつくし、偉大な死者の捕われの身となつてゐる弟子達の到着を待ったのです。ようやく彼等は来しました。でも七人だけチエーカの刑務所から出されたのです。バタキーの刑務所からは来ませんでした。しかし最後になつて、チエーカは委員会に保証し、同志達が釈放されホールへ向う途中だということです。

許可を受けた受刑者達が名譽な棺の担い手になつた。誇らしく悲しい中を彼等は最愛の師であり同志だった人の遺体をホールから担ぎだしました。街路では、巨大な人の集りが沈黙のうちに彼等を受入れたのです。銃をもたない兵士、水兵、学生、子供、あらゆる職種の労働組合、教職を代表する男女、農民、多くのアナキスト達、彼等は赤または黒の旗をもち、大群集が何の強制も受けず、秩序正しく、郊外のデヴィチ墓地に至る二時間の長い行進をしたのです。

トルストイ記念館ではチョピンの葬送曲とヤスナーヤ・ポリヤーナ(晩年のトルストイが佗住いし、自由学校運動を実施した村―訳註)の予言者に従つた人びとのコーラスが葬列に挨拶を送つた。わが同志達は了解して旗をさげ、ロシアの偉大な息子が別な息子に送るにふさわしい讃辞に代えました。

バタキーの刑務所を通過する時は、葬列は再びとまり、鉄格子の窓越しに別れを告げる勇気ある同志達に、クロボトキンの最後の挨拶として旗をさげました。

深い悲しみを感得した自発的な演説が、種々の政治的傾向を帯びた人びとによって、亡くなったわが同志の墓の傍で行なわれました。クロポトキンの死は偉大な道徳的力の損失であり、それに匹敵するものが祖国ではすっかり失なわれたと言うのが主調音でした。

ペトログラードへ来て以来、初めてわたしの声が公衆の中に鳴り響きました。それは自分にも奇妙に聞え、わたしにとってのピーターを表現するには不十分だった。彼の死についてのわたしの悲しみは、革命の敗北についてのわたしの絶望に組み合わせられ、そうした感じはわたし達のうち誰ひとりとして避けられないのでした。

太陽がゆるやかに水平線の下に没し、空は深紅に燃え、今やピーター・クロポトキンの永眠の地となった新しい土の上の天蓋にふさわしかった。

七名の仮釈放になった人びとは、わたし達とその夕べを過し、夜も遅くなって自分達の刑務所へ戻った。帰って来るとは思っていなかった守衛達は門を閉め引きこもっていた。受刑者達はほとんど押入るような形で入ったものだから、刑務所の職員共は、アナキストが同志の保証に恥じない程馬鹿げているとして吃驚したのでした。

バタキー刑務所のアナキストは、結局、葬儀に現われなかった。全露非常委員会はわが委員会に、機会を提供したが彼等はそうしただけでいいのだと言っています。それが嘘なのをわたし達は知っていました。そこでわたしは個人的に訪問して、受刑者達の言い分を聞くことにした。こんな不運な事でもチエーカに許可願いをださなければならぬのです。わたしは有力なチエーカの人物の私室へ通された。この男は若者でベルトに銃をはさみ、別の銃を机の上に置いていました。彼はわたしに面接すると腕をつきだし、気前よく「同志」と呼びかけました。彼の名はブレンナと言ひ、アメリカに住んで

いたとのことでした。彼は自分がアナキストで、むしろ「サーシヤ」の名前はよく知って居り、米国ではわたし達の活動をよく知っていたと言っています。わたし達が彼の同志であるのは誇らしい。当然今日共產主義者の側にいるけど、現体制はアナキズムへの踏み台だと考えている。革命が主要なことで、ボルシェヴィキがそのために働いているのだから、彼はそれに協働しているのだ。ところがわたし（エマの事）は革命の防衛者達から同志として差しのべられた手を拒否したのだから、革命家であるのをやめたのだと言ひ。

わたしはわたしの生涯で刑事と握手したことはない。また嘗てのアナキストだった人ともやりたいとは思わないと答えました。わたしは刑務所の通行証を貰いに来たのであって、それが得られるかどうかを知りたいと申しました。

そのチエーカの男は落着きをよそおっていた。へ通行証は問題じゃない。ただ説明して戴きたいことがある」と言ひ。彼は抽出しからクリップで留めた書類を取り出してわたしに寄こした。それはクレイトンの書いた論文で、わたしは既に数ヶ月前に見ていました。ブレンナはソヴェトの新聞にその論文の内容を撤回するのが重要だと言ひ。わたしはその訳文は既にアメリカにいる友人達に電報で送ったと答えた。そのチエーカの男はわたしの拒否はわたしにとってよくない事になる。同志として彼の感じたところをわたしに警告するのは自分の義務である。そこでわたしは「それは脅迫か」と訊ねた。「そんなことはない」と彼はぐずぐずいうのでした。彼は起ちあがりその部屋を出た。わたしは卅分待ちながら、自分が囚人にされたのではないかと案じた。ロシアでは誰でも順番が廻ってくるのだから、わたしがそうになったとしても不思議じゃないと思ひました。すぐ足音が近づき、ドアが大きく開かれた。明きらかにチエーカの人である老人が入って来てバタキーへの許可を呉れました。

刑務所に入っていた同志達の大きなグループの中で、わたしが会ったのは、米国でも知っていた人びとフアーニヤ、アロン・バロン、ウォーリン、アメリカで活動していた人びと、わたしがカルコフで知ったナバートの組織にいたロシアの人びとでした。その語るところでは、彼等を全露委員会の代表が訪問し葬儀委員会と調整した通り、そのうちの何人かを個人的に釈放するがグループとしてはできない、と言ったそうです。わが同志達は、信頼が破られたのを非難し、クロボトキンの葬儀には団体として列席するか、そうでなければ出席しないと主張したのです。訪問者はその要求を上司に報告し、最終決定をもつてすぐ帰って来ると言った。だが彼は遂に戻って来なかった。同志達はそれは少しも問題じゃない、と言うのは自分達でクロボトキン記念集会を刑務所の廊下で開いたのだからと言います。そしてその際には適当な演説と革命歌で敬意を表したとのことでした。事実、他の政治犯の助けをかりて、その刑務所は民衆大学になったのだとウォーリンが語りました。彼等は社会科学、政経学、社会学、文学等のクラスをもち、一般の受刑者に読み書きを教えていたのです。彼等はわたし達外部の者より自由を享受しているのだから、わたし達が彼等を羨やむべきだと冗談を言いました。それでも、彼等の天国はそう長くは続くまいとのことでした。

ピーター・クロボトキンと彼の仕事に、全生涯を包んでいた、ソフィ・クロボトキンは、失なったものによって、全くぼろぼろになっていました。彼女は、彼なくしては堪えられない、残りの日々は彼の記憶と努力の永続のために捧げたいとわたしに語りました。その適当な証明として、ピーター・クロボトキン記念館を建てるのが彼女の考えでした。それでわたしにモスクワに留まり、この計画の実現を助けて欲しいとのことでした。わたしはロシアの現状は最適の場所とは思えないが、ピーターへの適当な記念碑として、彼女の計画に同意した。だがその仕事は絶えず政府に請願しなければならず、

それはピーターの考え方や意志にそぐわない。けれどソフィは、すべてを考慮した上で、ロシアが記念館にとつての最も論理的な場所だと言います。ピーターは、ボルシェヴィキの独裁にかかわらず、祖国を愛し、その民衆に最大の信頼をおいていた。状況は心が破られる程だけど、自分は残りの人生をここで過したいとよく彼は語ったそうです。またソフィもロシアに忠実だった。今、ピーターがロシアの大地に休んでいるのだから、彼女にとつては二重に大事だとのことでした。

サーシャとわたしが記念館委員会にいてくれたら、アメリカから大きな支持が来て、ソヴェトに依頼することは少ないだろうと彼女は感じていました。クロボトキン葬儀委員会はソフィの計画を了承した。委員達は独裁の性質が何んであるかと、偉大な革命が実行されたのはロシアにおいてであるのは事実で、従つてこの国はクロボトキン記念館に適した故国だという意見でした。

ピーター・クロボトキン葬儀委員会は、ソフィ・クロボトキンを議長に、サーシャを書記長に、そしてわたしが管理人となつた記念委員会へ組織変えした。更にわたしはソフィがドミトロフを不在にした際彼女を代行しました。この組織は種々のアナキストグループの代表から成り、古いクロボトキンの生家を記念館とし、ドミトロフに在る住居はピーターの未亡人の家にすることをモスクワソヴェトに申しでることに決定したのです。

〔訳註〕 *1 ペトログラードの博物館Ⅱ革命博物館を設立する計画でサーシャは働いていた。

*2 カルコフ会議Ⅱ一九二〇年十一月、トロツキーは「外科手術」と称して、赤軍にウク

ライナのマフノの本部、チエーカにカルコフにある「ナバート連盟」を急襲させた。

その際ウォーリン、アロン・バロン、フアーニヤ・バロン、オルガ・タランチュラ、